

薩摩狂句 私の思い出

塚田 哲郎（2組）



毎月発行する薩摩狂句の機関紙に雑文を書いています。その中から、二二三。

「私が小学校一年生だったころ」（平成二十二年九月号）

小学校に入学したのは、昭和二十一年四月でした。「国民学校一年生」。校門のところの大きな桜の木が満開だったことをおぼえています。校庭に大きなクスノキが何本もありました。母に連れられて、子供の足で小一時間かかったと思います。入学式は「校庭で」行われました。担任の先生の後について教室に入りました。先生のお話を聞きながら、元気に返事をしていました。

すると、母が「迎えに」来ました。教室を間違えて隣のクラスに座っていたのです。校庭から教室に連れて行かれるとき、何を勘違いしたのか、取り残されたと思って、あわてて二つ前のクラスの最後尾に走ってついて行ったらしいのです。

前年の六月、鹿児島市が米軍の空襲で焼け野が原になりました。裏山の竹やぶの「防空壕」で、山の回りの夜空が赤く染まるのを見ました。やがて終戦。「玉音放送」を聞いた記憶はありません。

ところで、一度だけ宿題をやった記憶があります。学校の近くの同じクラスの女の子の家にいき、二、三人で一緒にやりました。はつきりはおぼえていないのですが、その時、その子のお母さんから「字を丁寧に書くわね」と褒められました。なんだか嬉しいような、誇らしいような気持ちになりました。

おやつに梅干を一個買って食べました。あの可愛かった女の子、今どうしているかなあ……。

トンキャンの「おばあ」（平成二十二年三月号）

奄美大島・古仁屋の町外れに、四キロくらい対岸に加計呂麻島が見えるトンキャンという岩場があります。そこまで行くのに砂浜沿いに、しがみつくようにして四軒の家があります。一番奥の家に、漁師の息子と二人暮らしの「おばあ」が住んでいました。長身で、日に焼けた肌に白髪が似合っていました。

年はついに聞かすじまいでしたが、七十歳くらいでも元気そうに見えました。息子は四十歳を過ぎて独身でした。そのことが心配の種だったようです。

四年間の古仁屋在任中、トンキャンの岩場に、おそろしく何百回と通ったと思います。最初の一・二年は挨拶を交わす程度でした。

ある朝、雨が降り出して、すぶぬれで家の前を通り過ぎようとした時、声をかけてくれました。熱いお茶を御馳走になりました。

古仁屋井でいろいろ話しかけてくれるのですが、半分も分かりません。適当に相槌を打つのが精一杯でした。それからと言つものは、顔を合わせるたびに、笑顔で話しかけてくれるようになりました。

名前もわからないまま、転動する時が来ました。離任式の朝も「お礼参り」のもりでトンキャンに釣りに行きました。

帰りに「おばあ」に転動になったことを話すと、目に涙を浮かべて、「元気でな、また来いよ。」と言ってくれました。それから、二・三年後、訪ねる機会がありました。おばあは亡くなっていました。

あの最後のことが今も耳に残っています。

英語が苦手……（平成二十一年二月号）

四十数年、英語を教えてきていながら、なんということをやつかと思われるでしょうが、これが本音です。

沢山の教え子にたいへん申し訳ないことをしたと思っています。いまさら、謝っても仕方がないことはありませんが、「本当にごめんさいー」

自分の勉強不足を棚に上げておかしな話ですが、英会話が特に苦手なのです。今、どの中学校、高校にもALT（外国語指導助手）という若い外国の人が英会話の指導に来ます。内気で人見知りの激しい私としては、このALTが特に苦手でした。ですから、出来るだけ側に寄りないようにしていました。

自分の会話力の無さを痛感した「事件」がありました。ある年、中米のスペイン語圏の国に、一週間ほど滞在する機会に恵まれました。その期間、意味は分からないながら、ずっとスペイン語が耳についていたのです。

その帰途、マイアミ・亞海でのことです。売店で買物をして値段を聞いたのですが、相手の言うことが分からないのです。てっきりスペイン語かと思ってしまったのです。二、三回聞きなおしても分からないので、とつとつレジの文字を見て支払いをするという仕儀になりました。

文字で書けば、小学生でも分かるような簡単な英語でした。でっぴりと肥った売りのねえちゃんも意地悪してか、ゆっくり発音してくれなかったのです……それ以来、英語がなお嫌いになったというわけです。

「付録」薩摩狂句あれこれ

薩摩狂句が誕生したのが明治四十一年だそうです。第二次世界大戦で一時途絶えていましたが、昭和二十四年ごろに復活しました。

鹿児島方言を駆使した川柳のようなものであることはご承知の方も多いと思います。現在では、ラジオ・テレビ・新聞などで熟年層には広く親しまれています。

私が薩摩狂句なるものを始めて、かれこれ四半世紀が過ぎました。少し面映いのですが、薩摩狂句は笑いの郷土文芸といわれることがあります。確かに、読んでも聞いても面白いものです。

もうひとつ重要な要素があります。それは、庶民の目線からみて世相を風刺することです。庶民の気持ちを代弁する反骨精神の表れであるともいえましよう。

ユーモア（諧謔味）と皮肉（風刺味）が薩摩狂句の大きな二本柱であり、醍醐味でもあります。

いくつかの作品をご紹介します。

「ユーモラスな句」

◎ 俊し女房

百円店で 肝を切っ

一目

《句意と解説》

倅約家の女房が百円ショップで気前良く買物をしたという意味です。一品百円ですから、どんなに「肝を切っても」たかが知れています。おもわず笑い出してしまふユーモアに富んだ句です。同時に、今の格差社会にも腹立たしい思いが込められているようにも感じられます。笑ってばかりもおおれない庶民の哀愴が漂う一句。

◎ 欲へ言えは

も一人欲しが 俊し女房

栄泉

《句意と解説》

欲を言えは優しい女房がもう一人欲しいものだという意味です。一読必笑の句です。ほとんどの男性の密かな願望がもしもありません。しかし、決して口に出してはいけません。

「風刺の効いた句」

◎ 国会の

謎掛け問答 埒ちや明かじ

酔人

《句意と解説》

丸で謎掛け問答のような国会の議論では、何事も埒は明かないという意味です。国会の議論を聞いていると、本当に国民のための政治がなされているのかと頭を傾げたくなることが多いようです。埒の明かない「謎掛け問答」などをして「遊んで」いる場合ではないでしょう。

◎ 喉元を

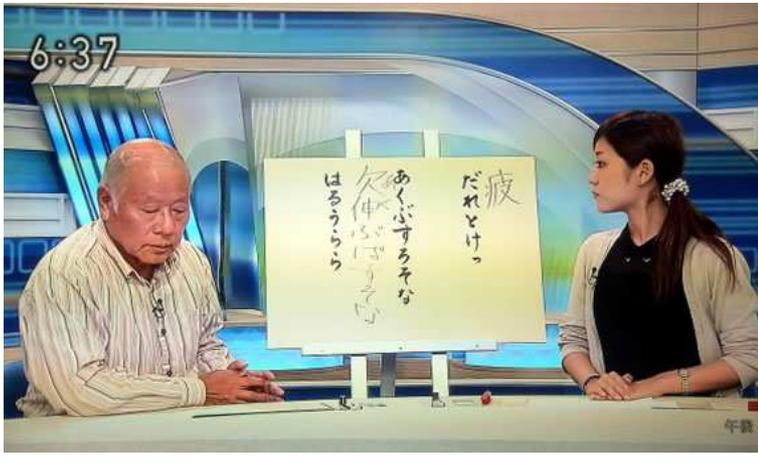
怖せ原発も 過ぎっ行っ

芙蓉

《句意と解説》

あの恐ろしい原発も喉元を過ぎてしまったという意味です。これは、原発事故からまだ半年しか経たない頃の作品です。鋭い刃物のような句です。これ以上の説明は不要でしょう。

《NHK鹿児島 毎週火曜日、「ひるまえクルーズかごしま」出演》



薩摩狂句誌「にがごい」より